黒い会長とモヤシな俺の４９８日

藤森みりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い会長とモヤシな俺の４９８日

【Ｎコード】
Ｎ０５４１Ｙ

【作者名】
藤森みりあ

【あらすじ】
俺、万々原悠暉（ままはらはるき）は、校内でも有名なパシリ！
いつものように不良にパシられてコンビニへ行くと……、
そこには、次期生徒会長、神御蔵紅科（かみくらくしな）がいて、彼女のとんでもない姿を目にしてしまった。
彼女もまた、俺の犯した罪を知っていて……。
秘密から始まる、不器用な二人の恋のはなし。

第1話　黒い会長と仮面（前書き）

お初でしょうか（＊^＿^＊）

違う小説と同時進行で書き始めました。

どちらかというと更新はスローペースだと思いますが、

どうぞヨロシクお願い致しますm（＿＿）m

第1話　黒い会長と仮面

時は初秋。

この時期と言えば……大変忙しい。

普通思い浮かべる事と言えば……、

文化祭？
体育祭？
テスト？

……いやいや。
それだけではないだろう？

まだ残っている。
とっても大事な学校の威信をかけたあの行事が！！！

そう、それは……。

新生徒会役員選挙および立会演説会だ！！！

今年の会長有力候補は女子生徒。

しかもトンデモ美少女である。

彼女は

２年６組　神御蔵（かみくら）　紅科（くしな）

一大企業、『神御蔵カンパニー』の一人娘、いわゆる大富豪というやつだ。

そのうえ成績優秀で、運動神経も抜群にいい。
柔道ではインターハイ出場経験もあるらしい。

そんな何でもかんでもするりとこなしてしまう彼女は、勿論のこと学校のアイドルである。

そしてまた、生徒会長という立場を持ったらその人気も爆発的なものになるだろう。

俺も彼女の魅力に心奪われ、特別な感情を抱いていた一人だということは言うまでもない。

まあ、そんなことは『今までの』彼女について述べたことだ。
ということは、今現在はどうなのだろうか……？
疑問は次から次へと浮かび上がる。

気になるか？

……では、語らおうではないか！
化けの剥がれた彼女の本性を…！

事の起こりは２週間前。
実は俺……、万々原（ままはら）　悠暉（はるき）は校内でも有名なパシリであった。
今日は何と、とんでもない命令を空き教室にて命じられていた。

「よう、ハルキー。俺ぇ、喉渇いちゃったぁ～。今から15分以内にコンビニからジュース買ってきてー」

別にもう学校は終わっていて、昼休みなどでもないから制限時間なんて設けなくてもいいはずなのだが、俺が息を切らして走ってくる無様な様をコケにしたいのだろう。

教師も手を焼いている斎木（さいき）という不良にいつも絡まれる俺。

なーんにもやってないのにかまわれる俺ってば、超かわいそう！

そんなことを表情にはおくびにも出さずに被害者面して、我ながら細いと思う手を斎木へと差し出した。

「んー？　なにやってんのー？」

もともと不細工な顔をこれでもかと言うほど歪めてわざとらしく俺に問うた。

そんな斎木に苛つきながらもパシリはパシリらしく従順に答えて見せた。

「あの……、お金をいただかないと……。」

すると、目の前にあった斎木の顔が、横に揺れて姿を消した。

……と思った瞬間！

バキッ！

鈍い音が体中を貫いた。

……いや、激しい痛みが、の間違いだ。

「……っ……、…」

斎木の堅く握りしめられた拳が、俺の鎖骨辺りにめり込んで吹っ飛んだ。

「調子にのってんじゃねーぞ、あん？　コラ。そんくらい、てめぇの金使えばいいだろーが。」

微かに鉄の味がする。

恐らく殴られた際に口の中を噛んでしまったんだろう。

口角の上がった不気味な笑顔は、斎木が放った言葉よりも俺に鳥肌を立たせた。

「でも……、財布なんて、持ってきてませんし……。」

『不機嫌を煽る』と校内の不良から好評の困ったように笑う『哀愁スマイル』を斎木に見せると。

「そんな顔しても、どーにもならねえだろーがよぉ？　えぇ？　…………ま、丁度いい。最近つまらねえと思ってたとこだったんだ。」

何もかも放り投げたかのような仕草をする斎木。

これはもしや……？

俺の苦悩の日々もついに幕を閉じるのか……。

勝手に思考を巡らせ、心躍らせる俺に『衝撃』という名の爆弾が降ってきた。

「ま・ん・び・き☆……してこい。」

血走った目をした斎木にワナワナと震えあがり、動くこともできずにいると、

「もたもたしてっと、目ン玉えぐり出すぞコラ」

ドスのきいた声で脅された。
この状態の斎木に言い返したら半殺しは確実……。
そう悟った俺は、真っ青な顔で教室を出てコンビニへ駆けだした。

走っている途中に思った。
半殺しではなくて、八分の七殺しくらいかなぁ……、なんて。

学校から一番近いコンビニに着いたのは5分後。
これなら何とか間に合う……。

だけど、万引き、か……。

人通りの多い割には空いている店内を見回して、誰も見ていないこと。カメラの死角であることを確認し、一本のジュースを手に取る。
それを、ダボッとしたパーカーに忍ばせ、漫画のコーナーに寄り、立ち読みする振りをしてから店を出た。

すいません、すいません……！

何度も何度も心の中で謝った。
表しきれない罪悪感をまといながら視界に入ってきた光景は……、

「きゃあ！　やめてください……！」

三人の男と、一人の女。
女の周りを、男たちが取り囲んでいる。
どうやらナンパらしい。

そして、取り囲まれている女、その人が神御蔵　紅科であった。

まあ、あれだけ可愛ければ、そういうこともしょっちゅうあるんだろうなぁ……。

喧嘩は弱く、割って入る気も更々ない俺は、さらに罪悪感を積もらせながらもただ眺めることしか出来なかった。
それに、時間が迫って来ている。
悪いけど、俺にも俺の人生があるんだ……、ゴメン…！

くるりと身を翻し、足を一歩前に踏み出したその時だった。

「聞こえねーのか…？　やめろっつってんだろ！！」

数人の呻き声、暴力を加えられた音。
ま、まさか……！？
そんな……！女子に手を加えるなんて非道なことしたんじゃ……！

「神御蔵さん……！？」

先ほどやりとりが行われていた場所には、男の姿は消えていた。
と、いうより。
地面に突っ伏していた。

そして、その中心に立って、制服の裾を直し、汚れた箇所をパンパンと払っていたのが、神御蔵だった。

「「……！？」」

なぜ神御蔵さんが……？

目を白黒させている俺ではあったが、恐らくこれは、彼女がした行為なのだろう。

そして多分、さっきの暴力的な発言も……。

また、神御蔵は、俺に目を向け……、というよりは俺の制服を見て目を見開き、顔面蒼白にしていた。

恐らく、自分が校内で（というか、校外でもだけど）どれだけ有名なのかを自覚しているのであろう。

もしかして俺……、見ちゃいけないもの見た……！？

出来るだけ自然に方向転換をして、早歩きでその場を去った。

「ちょっと待ってください…！」

遠くから神御蔵の声が聞こえた。

いやいや、待つわけにはいかないでしょ！

少しだけ自信のある足で、学校まで走って戻った。

どうやら、ここまではついてこれなかったらしい。

一安心して、ホッと息を漏らす。

これが、俺と仮面をつけない会長……、黒い会長とでも呼ぼうか。

その、運命が初めて重なった瞬間であった。

第1話　黒い会長と仮面（後書き）

拙い文面ですが、温かく見守ってくだされば幸いです♪

第2話　黒い会長と秘密の契約（前書き）

男性を書くのは難しいですね……。

頑張ります！！

第2話　黒い会長と秘密の契約

舞台は次いで、空き教室。

「おっせーーんだよ！！！」

憤怒を露わにした斎木が、俺に土下座をつかせ、息巻いていた。

「すいませんでした…」

頬を床に押し付けられ、必死に謝る。

「あぁん！！？　そんなんで足りると思ってんのかよ、コ……」

言いかけた斎木がハッと口をつぐむ。

何故なら……

「な……に、やってるの……？」

教室の入り口に人が立っていたからだ。

それは……、

「紅科チャン……！？」

だらしなく口元を緩ませる斎木。

いや、そこは驚くところじゃないのか？

……まあどうやら暴君でも、人並みの感情はあるらしい。

って、そんな場合ではなくて……。

神御蔵だ！

「さ、斎木くん…？　何やってるの……？」

眉根を寄せ、怪訝そうに神御蔵が言う。
やはり、さっき見た光景は幻であったのであろうか。
だって神御蔵は、そんな娘じゃねーもん！！

「違う！　ちげーよ！？　紅科チャン！」

「何が違うの！？　斎木くん、そんな人だと思わなかったよ！」

スラスラと嘘を並び立てた斎木に、なんと神御蔵は涙を流して非難する。
しゃくり上げる神御蔵に、ついに折れたらしい斎木は一つ息を漏らし、

「……ごめん、紅科チャン……。もう、こんな事しねーよ」

不細工な顔を赤らめて、頭を掻きながら謝る斎木。

「ホント？　約束だよ……？　あたし、もう生徒会長なんだから。これからはあたしが許さないよ……？」

モジモジしながら、上目遣いで斎木を見つめて言葉を紡ぐ。

「ああ。もう万々原にパシリなんてやらせねーし、ボコったりもしねー」

うぇっ！？
おいおいマジかよ！！！
こりゃあタナボタだ。
斎木も、神御蔵に言ったんだ。まさか破るなんてしねーだろうし……。

「絶対だよ？　万々原くんに何かしたら、斎木くん退学にしちゃうからね！！」

かっ、神御蔵……！
俺、お前のこと大好きだぜ……！

「お、おう」

斎木もタジタジしながら頷く。
やったーーー！！
俺の苦悩の日々も、幕を閉じたんだ……！
感涙してむせびそうになった俺に、神御蔵が微笑みかけた。
それは、俺の貧相な『哀愁スマイル』とは全然違う、極上の笑顔……。
そうだな……、『悩殺スマイル』とでも名付けようじゃないか。

「じゃあ、その……俺、用があるからよ、行くな！」

神御蔵の『悩殺スマイル』を浴びて、ヘニャヘニャの斎木は口元をほころばせながら教室を出て行った。

まあ、とにもかくにも俺のパシリ生活が終わったんだ！
今日は、プレミアムプリンで乾杯だな。
あ、パシリから卒業させてくれた神御蔵に礼言わねーと。

くるりと振り返った次の瞬間、

「神御蔵さんっ！ありが…とぅ……？」

ガタッ！！

目の前に神御蔵の顔があって、壁に押し付けられていた。

いやいやいやいや……。

漫画とかでこのシチュ見たことあっけど、役回り逆じゃね？

「かかかか、神御蔵さん……！？」

やべぇ、俺、動揺しすぎて声震えてるし。

「万々原くん……、さっきコンビニであたしのこと見てたよね……？」

うわぁー！

うわぁー！

超近くに顔あるよ！！

超可愛いよ、可愛すぎるよ！！！

「へぅん……」

神御蔵の声なんか耳に届かなくて、曖昧な事を言ってしまった。

や、照れてただけだけども！！

「やっぱ、そうなんだぁ？」

さっきとは打って変わって妖艶な声が放たれた。
え？
自分の耳を疑ったが、どうやら誤りではないらしい。
神御蔵に目を向け、確かめようとした途端……、

「んん……！！っ……！」

唇を押し付けられた。
力はどんどん強くなっている。
押し返すことも出来ない。
……てゆうか、女の力に敵わない俺って……。モヤシすぎるわ！！！

「……っ…！！……っ…、」

神御蔵は、ついばみながら何度も角度を変えて俺の唇を吸い取る。
ちょっとだけどいいなぁとか思ってしまったり……。
いけねーいけねー！！
残り少ない……というかもともとあんまり無い理性で神御蔵の足を踏んづけた。

「った……！」

神御蔵は、つぶらな大きな瞳を潤ませながら

「痛いわね！！　なにすんのよ！！」

と怒鳴った。
いやそれ俺の台詞ーー！
清純なイメージの神御蔵からそんな清楚さの欠片もない言葉が飛び出したのに驚愕した。

「や、やっぱさっきのコンビニの女って、神御蔵だったんだ……！」
もう、『さん』をつけるのも忘れていた。
っていうことは……、何、こいつ、裏表あるってこと！？
じょじょじょ冗談じゃねーよ！！
俺のオアシスが……！
「っつーか、なんで俺にキス！？　どうかしてんじゃねーの！？」
「キスは、罠だよ？　あんたを落とすためのね」
間髪入れずに神御蔵は、悪そうに片口をあげて笑った。
あんなに激しかったのに、息一つ乱さないところを見ると、こいつ、相当やり慣れている……！
俺の初チューがぁぁぁ！！！
「これ」
神御蔵がスッと取り出したのは、さっきコンビニで俺が盗ったジュースだった！
「あんた、さっき万引きしてたよね？　そのパーカーに入ってたし、盗ってるとこ見てたし。」
鏡を見なくても、顔が引きつっているのが分かる。
「このことばらして欲しくなかったら、あたしのことも黙っててよね」

鋭い光を宿したその目には、もはや優しさなど欠片も残っていなかった。

「でも、万が一のこと考えて、あんた、いっつもあたしの傍に居ること。」

そして、質の悪いあの笑みを浮かべた。

「分かったわよね？　これは契約だから。……破ったら、どうなるか。」

そこまで言ってから耳元に自分の口を近づける。

「考えておくことね」

勝手にしゃべって
勝手に出て行ってしまった。
……と思いきや。

「そうそう！　あたしのことは紅科って呼んでね。いつも傍に居るのに、名前じゃないなんておかしいでしょう、悠暉？」

ニヤリと笑って神御蔵……、いや、紅科は教室から出て行った。

そんなこんなで俺と紅科の契約が済まされて、波乱の日々が幕を開ける。

第2話　黒い会長と秘密の契約（後書き）

ほんとはここら辺までを
1話にいれたかったんですけど……（＜＿＞）

第3話　黒い会長とクラスメート（前書き）

今回、気づきました。
一応毎日ちょくちょく書いてますが、
更新ペースは週1辺りになりそうですm（__）m

第3話　黒い会長とクラスメート

「悠暉ー！　あたし今日、生徒会で遅れるから待っててくれる？」

俺のクラス、２－５は、紅科の隣のクラス。
教室の入り口からひょっこり顔を出して、ニッコリ微笑む彼女。

もう、彼女は生徒会長になっていた。
そんな季節だ。

「分かった。何時くらいまでかかる？」

振り返り、温和な目で彼女を見つめる。

「うーん……。そうだなぁ……、一応5時半くらいには終わると思うけど……。あっ！　あたし、悠暉に、その……、話したい事が、あっ、て……」

恥ずかしいのか、耳まで赤らめてモジモジと語尾を小さくする紅科に……、いや、俺にだろうか。いや完全に俺だな、うん。そう、俺にヒューヒューと冷やかしが飛ぶ。

「告白かーーー？　ンーー？」
「ついに悠暉も春かー？」
「おいおい！　眩しいぜ！！　眩しすぎるぜ！！！」
「紅科チャーーン！　超カワイーーーー！！！」

年中脳内お花畑の奴らは、どこにでも居るものなのだろうか。
呆れてしまう。

だが、同時に助かっていたのもまた事実である。
前に、斎木が紅科に誓った事があったのを覚えているだろうか。
その時を境に俺へのパシリの扱いは殆ど過去の産物になっていた。

「じゃあ、俺ココで待ってるから。仕事、頑張って来いよー」

そう言った瞬間、口笛やら野次やらがピークに達した。
こんなに囃されても俺たちの間には何もないのに。
……そう、俺たちがこんな風に会話しているのは虚偽なのである。
では何故こんな会話をしているのか……。
それは、秘密裏に契約を交わしたからである、彼女と。
実は、俺は彼女のとんでもない姿を目の当たりにし、また彼女も俺の犯した罪を知ってしまった。
そのことは、彼女にとって傷になる出来事であり、
俺にとって傷になる出来事であり……。
だから、俺たちはこの事が他に漏れないようにと契約をしたのだ。

「悠暉？」

不意に、紅科がまた俺のことを呼んだ。

「ん？　何……」

ふわりと、彼女の色素の薄い髪の毛がなびいた。
そして俺の視界を遮る。

「ちゃんと、待っててね……？」

紅科は、紅潮した頬に片手を添え、恥ずかしそうに俯きながら囁いた。

「わ、かってる…よ」

思わず見とれてしまった。
彼女の美貌は、もう飽きるほど見ていた……、はずなのだが。
どうやら『飽きる』なんて、永遠に無いみたいだ。

そして、そのまま俺に顔を近づけてきて言った。
誰にも聞き取れない程、小さな声で……。

「何？　あたしに惚れた？　顔真っ赤だけど」

そうして、誰も見ていないことを知ってか知らずかほくそ笑んだ。

「あ？　んなワケねーだろーが」

まあ、小さい声ではあるが言い返した。
この女は、空気というものが読めないのだろうか。

「気ィ、つけろよ。その口の利き方。」

女らしからぬその口調！！！
いつもの優しい神御蔵さんはいずこへ！？？
俺も彼女も同じ立場のはずなのに、何とも彼女の方が有利なような状況になる。

いつも。

「知ってるっつーの……」

結局折れた俺が、溜め息混じりに吐くと。
納得したように笑みをこぼして。

「じゃあ、ね。悠暉……」

熱っぽい目で俺のことを見つめてから紅科は教室を後にした。
いやぁ、感心します！
あんたすげーよ！
それで何年嘘突き通してんだよ！
もう神だよ！！！

俺は、紅科を見送ってから、また溜め息を吐いた。

しばらく経った。
俺は、特に何もすることが無かったため、ボーっとしてた。

ふと、周りを見渡すともう、誰も居なかった。

カーテンが風になびいて揺れる。
すると、好いにおいが鼻腔をつく。

振り返るとそこには……

「明日葉（あしたば）さん……」

言葉が自然に口からこぼれた。

「うん。祭(まつり)でいーよ。みんなそう呼ぶ」

そう言ってニッコリ笑みを浮かべた。
彼女は、俺のクラスメートの明日葉(あしたば)　祭(まつり)。
いつも憂いを含んだ瞳で、少し話しかけにくいイメージがあったんだが、向こうから話しかけてくれるとは……。

「どうしたの？　委員会？」

本当に意図が掴めなかった俺は、彼女に問うた。
少々不躾だったかもしれない。
まあでも確かに、俺と祭は同じ委員会で。

「ううん、違うよ。ただ、ちょっと万々原くんに、聞きたい事があって、ね」

気のせいか？
少し、顔が赤いような……。

「え……、何……い、い、委員会じゃねーの？」

一応。いやホントに一応。
祭ちゃんは美少女。
実際話したことはあまり無いが、
委員会が一緒……、というのと。
珍しい名前ー……、というのと。
……カワイーなー……、っていうので覚えてた。

いや！いやいやいや、別に不純とかではねーって！！！
ちょっと声上擦っただけだって！！

「その……、さっき、神御蔵さんと親しげなとこ見たから……。仲、いいのかなぁ…って」

んんー？
何コレ！？　俺、ヤキモチでもやかれてんの？？
対して喋ったことねーけどコレ、脈アリってやつか！！？
……嫉妬ってヤツなのかコレは？？

「や、その～……。なんていうか。仲がいいまではいかねーよ？」

ちょっと期待して言ってみた。

「そうなの？　名前で呼び合ってるから、その……、そういう仲なのかなぁ……って、思って……」

そう照れくさそうに言って、前髪をかき上げた。
仕草まで可愛すぎるよ、祭ちゃん！！

「何？　何でそんなこと聞いたの？」

って、赤い顔の祭ちゃんに笑い混じりに言ったら、

「万々原くん、のこと……、気になって……」

顔が引きつるのが分かる。

まさか俺……、紅科のこと好きとか思われてる？
思われてるのか??

「あ、のォ……。俺、別に紅科のこと好きってワケじゃねーよ…？」

あり得ない！！
断じてそれだけはあり得ない！！！

すると祭ちゃんは、薄く涙の膜をはらんだ目で息をついた。

「そう……な、の……？　よかったぁー……」

「え？　何が？」

急に泣かれるかと思った……。

だが、この後本当に泣きそうになるのは俺の方。

「あたし、万々原くんのこと」

そこまで言って、急にカーーッという具合に顔を赤くする。
さすがにここまで来たら分かってしまう。
脈アリのレベルでは……、ねーよな…。
でも俺、そんな喋った記憶無いんだけど……。

「その……、万々原くんが……、あたし、」

やばい、やばい！！！
俺までつられて真っ赤だけど！！

と、ココで。

「はーるきーー！！　生徒会終わったぁー！」

と教室にスキップしながら入ってきた女が一名。
先ほど紹介した、空気の読めない女である。

「紅科」

「神御蔵さん……」

お願いだから、場の空気感じ取って！！

「あ、祭ちゃん。何かあったの？」

と、祭に向かってニッコリ微笑む。
どうやら『悩殺スマイル』は、同性に対しては発動しないらしい。
便利な機能だなおい。

「ううん、何もないよ。」

遠慮がちに微笑むと、なんと！
教室を出て行ってしまった……！！

廊下にパタパタと小気味よい足音が響いていた。

「おい、紅科！　てめえ……！」

初・告白を邪魔されて涙ぐむ俺。

「何？」

対して紅科は、興味もなさそうに素っ気なく返す。

「ぜってー許さねえ！！！」

紅科の態度にも、自分の行動にも腹が立っていた。

「は？　ちょっ……どこ行くの！！」

後ろから紅科の声がぶつかってくる。

「祭ちゃんトコ！！！」

振り向かずに、走りながら叫び返す。

そして、無我夢中になりながら彼女を追いかけていた。

第3話　黒い会長とクラスメート（後書き）

中途半端ですいませんm（＿＿）m

ただ、長くなりすぎてしまったもので……。

第４話　黒い会長と空っぽの二週間（前書き）

長らくお待たせしてしまって申し訳ありませんでしたｏｒｚ

待っていてくださった皆さん、

本当にありがとうございました（＊＾＿＾＊）

第４話　黒い会長と空っぽの二週間

酸素を必死に取り込もうとし、肩で息をする。
額には僅かに汗が滲み、体も若干熱を保っていた。
かなりの距離を全速力で走ってきた。
一人の女の子の背中を追って。
だが、来た道が悪かったのだろうか、彼女が早すぎたのであろうか…。
その姿を再び見ることは出来ずに終わった。
俺も決して足が遅いわけではない。
ということは恐らく、前者で間違いないだろう。

「祭ちゃん……」

喘ぎながら、しかしはっきりと名前を呼ぶ。
だが、周りに誰もいないこの場所ではそれは虚しく、地に吸い込まれていくのだった。

「悠暉！」

ふと遠くから紅科の声が聞こえた。
無意識に振り返って見れば、髪の毛を振り乱し、息を荒げながら走ってくる姿が小さく見えた。
やがて紅科は俺のもとへ駆け寄り、ホゥと息を吐いた。

「悠暉、その……ごめ……」

珍しくどもって喋る紅科。
だが今はそんなので冷やかす気分にもなれなかった。

くるり、身を翻して歩く俺に、尚も語りかける紅科。
「悠暉！　本当にあたしが悪かったと思う。知ってたよ、告白だろうなって…」
冷静でいられない。
頭にカッと血が上る。
何で、見当ついてたのに邪魔したんだよ…！
紅科の手が伸びる。
「さわんな！！」
ビクッと体を強張らせる。
ちらりと目に入った、紅科の表情が…、
とても怯えたようなその顔が、何とも俺の苛立ちを倍増させる。
「ふざけんな、てめぇ…！知ってたんだったら入ってくんじゃねえ！！」
少しだけ触れた紅科の指先をちぎれんばかりに振り払う。
「っ……！」
小さく漏らしたその声が聞こえなかった訳では無かったが、足早にその場を去った。
その時、紅科の大きな瞳から涙が零れたのを。
もちろん俺は、そんなこと知る由もなかった。

「悠暉ー！　テスト結果張り出されてる、見に来いよ！」

紅科と口をきかなくなってから2週間が過ぎた。
パシリから解放された俺は、少しずつではあるが、周りに人が出来はじめていた。
紅科の影響も大きかっただろう。
そこまで考えが至ったところで、紅科が思わず思考に入ってきたことに苦笑が漏れる。

「なぁ、悠暉ってばーー」
「おー、今行くー」

1．姫澤　咲　　４８６点
2．神御蔵　紅科　　４７８点
‥　‥　‥

「……は？」
「紅科チャン、一番じゃない……」

見れば、周りも少なからずざわついている。
さらに見渡してみても、紅科の姿は見当たらなかった。
いつもならぶっちぎりで５００近く獲る紅科が４７８点って……。

や、まあ十分にすごいけど…。
結構真剣に考え事に耽っていたのだが、隣ではみんな呑気にもう違うことを語り出している。
「てか、この姫澤(ひめざわ)チャン？　咲(さき)チャン？　すげぇーー！！　そして超かわえー！！」
「あー、俺も思った！　ぜってー可愛いよなァ、逢いたい！」
「運命よ！　神よ！　彼女と俺を引き合わせてー！」
いや名前かよ！
名前オンリーかよ！！
会ったことねーのかよ！！！
どんな娘かと思ったわ！
「なあ、悠暉ー」
「ん？　俺はいかがわしいことは考えてません！」
「あ？　何言っちゃってんの、お前突然。……いかがわしいこと考えてたんだ？　な？」
「考えてねーって！」
突っかかってきたのは、最近よくつるむ我妻(あがつま)　恭慈(きょうじ)。
くだらない言い合いが揉め事に発展してしまった。
どうせ小突き合いで終わるのだろうと思っていたのだが、我妻から予想外な言葉が飛び出た。
「じゃあ、紅科チャンのコトでも考えてたのか？？」

途端、準備していた言葉を飲み込む。
目が見開かれるのが自分でも分かる。
同時に自分の単純さに腹が立つ。

「やっぱりな」

「は？　何で俺が紅科のことなんか考えなきゃいけねーんだよ」

咄嗟に口を突いて出た言葉は、小学生の語るそれよりも幼く感じた。
少々上擦った声が、より子どもらしさを演出していた。

「だってお前、気づいてないかもだけどよ、いつでも紅科チャンのこと探してるぜ？」

そして、耳元でぼそりと呟いた。

「2週間前から……な」

そして、俺の顔を覗き込み、ニヤリと笑う。
そして徐に口を開き、ポンと背中に手を置いた。

「俺、こんな時の為に紅科チャンの居る場所、リサーチしといたから行ってくれれば？」

ゆっくりと我妻を振り返れば口元に弧を描き、優しい微笑を浮かべていた。
長い付き合いでもないのに、ここまでしてくれるヤツって、正直あんまりいない。
素直に良い奴……と感動していれば。

「っつーことで？　悠暉に協力したから、俺にも協力してね♪」
やっぱり世の中そう簡単にはまわらないらしい。
とはいえ、協力してやらないのも酷だろう。
「何？」
「あれ。……姫澤咲チャン。どんな子か探しといて～」
そう、息巻くと。
風のように去っていった。
恥ずかしかったのか？
……いや、まさか（笑）
まあ、とにかく俺は、紅科の元へと歩を進めた。

「紅科」
普段出入りなんか殆ど無い図書室。
最近はここに入り浸っていたと、我妻から聞いた。
ふわり…、
色素の薄い髪の毛が窓から漏れる太陽の光に反射して、眩しかった。
紅科は、俺を見るとギョッと顔を強張らせ、開いていた参考書の山

をもの凄いスピードで片付け始めた。

「紅科」

もう一度、呼んでみる。
でも、紅科はもう振り向きもせず、片付けも終わってしまった。
そして、足早に俺の側を通り過ぎ、図書室から出て行ってしまった。
人気のない廊下に、軽快な紅科の足音が木霊する。
ただ呆然と立ち尽くしていただけの俺だったが、自然と体が図書室の外に向く。
次の時には、もう走り出していた。

「なあ！　紅科ってば！！　待てよ！！」

かろうじて見えていた彼女の背中はいつしか見えなくなっていた。

そろそろ、帰ったか…。
自分の中でも蹴りをつけ、諦めかけたとき。
幾度も角を曲がり、窓の外を見遣ると、そこには縮こまった紅科が見えた。
でもそこは、反対の校舎だから、行くのに時間がかかる。
また見つかったら厄介…、そう億劫になっていた俺は、その場所の死角になる場所を選んで彼女に近づいていった。

5分後、やっと着いたそこは駐輪場の傍だった。
憂鬱に包まれた紅科を見ていて、俺がそんな顔をさせているのかと、落ち着かなくなった。

すると。風に揺れた、彼女の色素の薄い髪の毛が俺の頬を撫でた。
いつの間にか、それほど近くに来てしまっていたのだ。

案の定、振り向いた紅科。
あの心地よい感触が離れていく……。
紅科が、俺から離れてく……。
何故かそんな考えが頭をよぎって、その場から立ちかけた紅科の肩を、思わず抱きしめていた。
「っ！？」
小さく、声をあげた紅科。
久しぶりに……、
２週間ぶりに聞けた紅科の声。
どうしようもなく嬉しくて…。
肩にまわる自分の手に、より力を込め、再びギュ、と抱きしめる。
「紅科……、もうちょっとだけ」
紅科からやるせない息が漏れる。
ほぼ無意識で、紅科に手を伸ばした。
きっと、この時から…。
とっくに心は動き出していたんだ。

第４話　黒い会長と空っぽの二週間（後書き）

急展開でした、
今まで更新が無かった分
一番私が焦っているのかもしれません（^__^；）

本当に
申し訳ありませんでしたｏｒｚ

第5話　黒い会長と仲直り（前書き）

前半は微シリアスです。

後半は……、いつものテンポですかね（^―^；）

第5話　黒い会長と仲直り

トク、トク、トク、トク……

俺と紅科の鼓動が重なって、気持ち良いリズムを刻んでいる。
そっと瞼を伏せ、響くその音に耳を傾ける。

速くなりつつある鼓動を、自分だけのものにしたくてもう一度、強く腕に引き込んだ。
小さく聞こえた声に、聞こえなかった振りをして。

だが。
そんな時間は一瞬のうちに粉々になった。

紅科を抱き寄せた時には、もう欠片も残っていなかった理性が、チャイムによって無理矢理引き戻されたのだ。
それは紅科も同じだったらしく。

バッと、俺たちの体は電光石火で離れた。
そして勢いよく振り返った紅科の長い髪の毛が俺の頬にバチンと当たって、

「でっ！！」

平手打ちされた気分になった。

「ぅわあ！　ごめん悠暉！　超痛かったよね！」

そう言って、再び俺に触れる紅科。

まあ、当然の如く顔は近づく訳で。

この場合、俺は不可抗力。
断じて不可抗力。

だから、顔が赤くなっても仕方ない。

っつっても、俺は紅科の髪の毛打ち食らってたから別に不思議では無いんだけど…。
だからといって、紅科の頬が真っ赤になるのを近くで見て、平気でいられる訳もない。

「っ！」

たぶんもう、俺の顔もゆでだこ状態。
髪の毛で赤くなったというには、不自然なくらい赤いだろう。

……とまあ、そんなこんなで場の空気は和み。

何となく、俺と紅科は仲直り出来たみたいだった。
だけど、俺は何となくで済ませるのがイヤだったから、謝った。

「紅科……、あの、さ…。俺も言い過ぎたとこあったから…、その、ゴメン…」

ちょっと言い訳みたいになってしまったけど、伝えたかったことは伝えられた。

「ううん、あたしが悪かったわけだし。……ゴメンね」

改まって謝りまくる俺たちは、きっと端から見たら変人同士。
だけど、そんなこと今は微塵も興味ない。

どちらともなく笑みがこぼれる。
その和んだ空気が何にも変えがたく心地よかった。
……紅科と居てこんな気持ちになるなんて思っても見なかった。
俺の前では、偉っそうな態度してるくせに、何というか……、こう…。
しおらしさを…、感じてしまったからだろうか。

“女子”……って感じ？

……いーやっ！
待て、待つんだ悠暉！！
一旦、リセットしよう、それがいい、うん。
おし！　リセット完了！！

何なんだ、この、“意識しちゃってるな俺…”。な流れ！？
断じてあり得ませんってーの！！

心の中でシャウトしまくる俺に、紅科が声を掛けた。

「ねえ悠暉」

ケンカの仲直りがたった今だったからだろう、微妙に気まずさが残る声色で遠慮がちに言葉が紡がれた。

「あ？」

だが俺は、自分の反応にも

紅科のしおらしさにも
どうしようもなく腹が立っていて、きっと声を掛けるのにももの凄く勇気が必要だっただろう紅科に怒りをぶつけてしまった。
「！？　何なのよそれ！　あたしが声かけてやったってゆーのに！！　……このっ、悠暉ごときが！」
どうやら俺は、人を苛つかせる才能を持っているらしい。
厄介なスキルだ。
紅科を煽ってしまったようである。
……でも、さ…。
ちょっと言い過ぎじゃね？
リアルに傷ついた。ナニ“悠暉ごとき”って？
反発しようとして発し掛けた声が喉の奥で消える。
そんな様子を見て焦った紅科が、慌てて否定する。
「っていうのはウソだよ！　悪かったわね！　……ちょ、何目ぇ潤ませてんのよ、ホントなよっちいわね！」
そしてまた、あ、コレもウソよバーカ！　と言い直す。
本当にこいつは、人をけなしてんのか、素直になれないのか……。
でも、こんな紅科見れるのは俺だけなんだよな…。
人は知らない紅科の本当の姿を、俺だけが知っていると考えると、誰に対してだか分からないが優越感が生まれて、勝ち誇った気分になった。
「な、紅科…。なんか奢ってやるよ」

不意に口を突いて出たその言葉に、紅科が元々大きな目をさらに大きくしている。
そりゃそうだろう。
前まで俺は、パシリ生活一筋だったから金欠が当たり前の状況だった。
それが今は、奢ってやれるほど懐の大きな男にまで成長したのだ。
紅科が俺の成長に感動しているのも頷け……

「なんだその上から目線！！　あんた勘違いしてる！？」

いやそっちかい！！
俺の大人の階段ぬんぬん！！
もはやスルーの域を超えてますよ紅科さん。
俺、何気に結構ＨＰ削られてるからね！？

「あ、わり…。……じゃあ、その、俺……、帰るわ」

そんな、迷惑掛けて喜ぶヤツじゃねーし…、とその場を立ち去りかけたら。

「はあ？　なんか奢りたいんでしょ？　付き合ってあげるわよ、しょーがないから！！」

俺は、今更ながらやっとこいつの性格を理解した。
そう、多分こいつ……、俗に言う“ツンデレ”ってヤツだ。
そして、その方程式も完璧。

『紅科（素直じゃないヤツ）＝ツンデレ』

出来た！！

「で？？」

「は？」

互いに疑問をぶつけ合う俺たち。
てか、俺がやっすい考え事してたから聞いてなかっただけかもしれないけど。

「どこ連れてってくれるの？」

心なしか、紅科の口の端が微妙に上がっている気がする。
ぜってー俺のことなめてる！
こうなったら、もうプライドが許さないぜ！（※俺にもプライドはあります）
ちょっと高めの店だがしょうがない。連れてってやろーじゃあないか！！

「……駅の近くに出来た、あそこのファミレスでどーだ」

「ふーん。ま、いんじゃない？　お金は足りるのか知らないけど」

クッソ、語尾にハート付くような喋り方しやがって。
意地でも間に合わせてやる。

「で？？」

「は？　またかよ」

内心、面倒くせーと思いながら問いかけると、
「だーかーらー！　どうやって行くのかって聞いてんのよ！」
「は？　お前ん家迎えに来るんじゃねーの？　あのでっけーリムジン」
「バカじゃないの！　もう完下過ぎてるからとっくに帰ったわよ！！」
「で、電話掛ければいーじゃん」
「いっつも勝手に来るから、電話番号なんて知らないわよ！」
「いやそこは偉そうにすんなやぁ！！　どーすんのお前、俺ついでに乗ってこうと画策してたんだけど！？」
「だから知らないわよ！　そもそもあんたのせいであたしまで遅れちゃったんじゃないの！」
「お前が原因つくったケンカだろーが！！」
ハァハァと息を切らして、怒鳴り合った俺と紅科。
すると、紅科がハッとしたように俺の方を向く。
「あんたさぁ、いっつも学校にどうやって来てるのよ」
真っ直ぐ俺の目を見据える紅科。
「あ？　チャリだけど……あ」

「決まりね。乗せなさいよ」

と、ニッコリ微笑んだ。

まったく…。

この笑顔を“天使”だとかほざくヤツはどこのどいつだよ。

俺には悪魔にしか見えないがね。

第5話　黒い会長と仲直り（後書き）

なんだかんだで第5話です。

ここまで読んでくださってありがとうございますm（＿＿）m

第６話　黒い会長と初恋の日の面影（前書き）

遅れてしまって申し訳ないｏｒｚ

後半はマジシリアスです。

中篇予定なので、展開早いんですけど、我慢してくださいｍ（＿）ｍ

第6話　黒い会長と初恋の日の面影

「ちょっと！」

すぐ後ろで紅科が怒鳴っている。

「もうちょっと丁寧な運転出来ない訳！？　あたしがか弱いの知ってんでしょ！？」

「うるせー！！　元はと言えばお前が自分家の電話番号知らねーのがわりぃんだろ！！　っていうかお前、自分がか弱いとか思ってんの！？　それは俗に言う、“勘違い”ってヤツだ！」

「うっ！　うるさいわね！！　電話なんて普段しないんだから当たり前でしょ！」

「いや当たり前じゃねーよ！！　お前、相当イタいわ！」

今、俺たちは駅前に行くための近道を通過している。
だがこれが、とんでもなく道が悪く場所であった。
もの凄く急な坂道を飛ばして走っているため、会話は大声でなければ通じない。

……とはいえ、俺、ここ通ったことないんだよね。
テヘ。

……あ、気持ち悪い？　分かった、やめるね（涙目）

まあ、紅科が尋常じゃない方向音痴を遺憾なく発揮してくれたので、結局道に迷ってしまい、誰も通りたがらないこの歪な形をした近道に来た…というわけだ。
幾度お前のせいだと言っても、彼女のデカ過ぎるプライドはそれを認めたくないらしい。ホント、何から何まで困った女である。
自転車に乗るとか言ったときのこいつは超可愛かったのに。

＋＋＋＋＋

「なーにやってんだよ！　早く乗れって！」

俺は、自分の自転車に跨がり、紅科に向かってぼやいている。
最近はパシリとして扱われることが少なくなったため、金魚のフン的な頻度で“パシリ”の後ろに引っ付いてきた“嫌がらせ行為”も極端に減り、俺の自転車の鍵は放課後になってもまだ生きていた。
その自転車の鍵を指に引っかけ、華麗にクルクルと回す。…俺ってちょっとカックイー！

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ……」

なぜかモジモジして、目線を逸らす。
さっきからずっとこの調子で、自転車に乗ることを渋っている。
……自分が言い出したくせに。

「もういーから早く乗れって！」

とうとう痺れを切らし、紅科の手を取り半ば強引に俺の後ろに導いた。
そして、ストンという具合に荷台のところに収まった紅科は、今まで渋っていたのはウソかと言うくらいに、

「いった！　ここって超痛い！！」

今度はギャーギャー喚き始めた。
そして、体を大げさに揺さぶり、自転車をガタガタ言わす。

「うるさい！　ちゃんと掴まれ！」

ジタバタする紅科の手を掴み、俺の腰へ回した。
すると、

「ぬおっ！」

奇声が発せられた。

「何なんだよ！　それと、もっと女らしい声出せよ！」

「だってだって……」

また急にモジモジし出す。
柄に合わない…。
見ているこっちの身にも若干危害が及ぶわ、コレ。
そう察知した俺は早急に次を促した。

「早くしろって」

一瞬の間。

「は…、恥ずかしい……」

そう言うと、俯き、黙りこくってしまった。
ちょい、今の反則でしょ。
俺の頬、尋常じゃなく熱いんですけど。
“頬が熱く熱を帯びている”……とかそういう生温い表現じゃねーってば！
とにかく、何か喋らねば！
赤い顔を隠すようにして、口元を手で押さえて語ると、少し声がくぐもっていた。

「……、お前に合わせるから。だから、早く乗って」

「う、うん……」

いや付き合いたてのカップルか！！！！！
なんでこんな
“甘酸っぱい青春を謳歌♪”
みてーなことしてんだ俺！　相手は紅科だぞ！？　よりにもよってこのゴリラ！

紅科は、そろそろと歩き出し、ゆっくりと荷台に乗った。
そして、遠慮がちに腕を腰に回してくる。
ちゃんと乗っていることを確認してから徐にペダルを漕ぎ出す。

俺の音か、紅科の音か分からない。
この鼓動は…。

きっと、2人とも緊張してる。

紅科は、思ったよりも軽くて、
俺の腰に遠慮がちに絡められた腕は、吃驚するくらいに細かった。

近くにいることを、痛いほど認識させられる。
いつもは、近くにいるのに遠く感じる彼女だけど、少しだけ…、近づいた気がした。

柔らかい彼女の髪の毛がなびくたびに、何に対してだか分からないが、僅かな優越感が生まれたのは俺の秘密。

自転車に2人乗りして、強く生まれた感情があった。

あれは約4年前の、春。

優しくて、今にも壊れてしまいそうな笑顔が印象的だった。

……こんなに彼女に近いと思った人間はいない。
この、儚げに細くて華奢なひとを、ずっと探していた。
彼女が突然いなくなった日から、ずっと追い求めていた。

……中学の頃、見失わないように必死で抱きしめていた、俺の幼く淡い初恋。

毎日羽織っていたカーディガンの綻びを。
振り返るたびに甘く誘うあの薫りを。

その瞳にいつでも宿っていた翳りを。
彼女の面影の全てを…。
俺は忘れることが出来なかった、ただの一日も。
そして、紅科を自転車に乗せたこの日から。
俺は彼女を意識せざるを得なくなる。

＋＋＋＋＋

すっかり、日も落ちていた時間に出てきたから、間に合うかどうかは微妙だった。
…でも、俺の脚力なら大丈夫だって思ってたんだ。
いや、絶対に大丈夫だった。

「だけどお前の方向音痴のせいで俺の計画がパーだよ！！」

「あたしは方向音痴じゃない！　バカじゃないの！？」

８時閉店のこの店は、つい１０分前に閉じられていた。
もうダメだ……、俺、ダメだもう……。
心の中で弱音を吐いていたつもりだったのだが、どうやら外にまで漏れていたらしい。

「そう？　全くヘタレね！　帰りは私が送るわ、後ろの荷台に乗って！」

そういやこいつ、スポーツも出来んじゃん。
全部任せときゃ良かった。

女に頼るなんて情けねーけど、疲れたからしょーがない、うん。
「マジ？　んじゃ任せたわー、ヨロシク」
「ハーイ」
何故だか上機嫌になった様子の紅科。
俺は荷台に乗って、紅科の背中に縋りつくようにへばった。
「は、悠暉！？　ちょっと、何してるのよ！」
紅科の声が聞こえたけど、そんなのお構いなし。
俺は深い眠りへと誘われた。

それから幾らくらいたったのだろうか。
遠くで俺を呼ぶ声が聞こえる。
「悠暉ー！　起きてよ！　あたし、道分からなくて…。助けてよー」
なにやら途方に暮れている様子。
誰、だろう……。
細いシルエット…。
まさか……、
「い、の……り……？」

無意識の内に紡がれた言葉。
４年前の清らかな思い出……。
阿澄（あすみ）　祈（いのり）
これが、彼女の名前。
……俺の初恋の人。

相手の姿を確認する前に俺は再び闇の中へ葬られた。
一瞬開けた意識の中で、紅科が視界の隅に映った。
だけど、その端正な顔に浮かんだ表情に、俺は気づかなかったんだ。
ただ、祈の姿が少しでも垣間見えたことが、死ぬほど嬉しかったから……。
まだ、俺の中の彼女の影は、拭えない。

第6話　黒い会長と初恋の日の面影（後書き）

ホントに急ですみませんm（＿＿）m

3月までに終わらせたいなと思っているので、ペースあげていきます！

第7話　黒い会長と失踪した少女　～過去篇～（前書き）

今回は過去篇となっています。
シリアスモードなので、つまらないという方は飛ばしてくださっても結構です。

悠暉と祈の関係などを描いた話ですので…。
ただ、最後の方は若干未来軸となっております。

いろんな意味で、注意してご覧になってください。

第7話　黒い会長と失踪した少女　～過去篇～

「祈ー！　俺、今日のテスト満点だったんだー！」

４年前、中学生。
まだ恋を知らない俺。

「悠暉、危ないよ。そんなに速く走ったら転んじゃうでしょー？」

いつも、彼女は微笑んでいた。
この日もケラケラと、飾り気のない声で屈託なく笑う。

「大丈夫だって。俺、運動神経はいいから」

俺は学ランの胸のところに手を置き、胸を張って答える。
するとまた笑って俺を喜ばせるんだ。

「うん、そうだね。運動してる悠暉、私好きだなー」

みるみる真っ赤になっていく俺の顔に、彼女は気づいていただろうか。
祈は、顔の赤さと比例するように口数も少なくなった俺に、優しく笑って語りかける。

「もう！　悠暉ってば素直なんだから！」

堅くなった俺を小突いて、俺の心までもとかしてしまう。
不思議なひとだった。

彼女と初めて会ったのは、中学1年生の時。
同じ学校の同じクラスで、隣の席だった。

「万々原くんっていうんだ。私は、阿澄祈です。ヨロシクお願いします！」

冗談交じりに頬を可愛らしく膨らませ、瞬間、弾けたように笑ったのを記憶している。

ただ、その時笑った祈は、何かを必死で堪えているような…。
そんな、今にも壊れそうな笑顔だった。

俺はそれほどに無理していそうな彼女が気にかかり、そしてまた、知らず知らずのうちに彼女に惹かれていたんだ。

「悠暉、私、桐原(きりはら)くんに告白されちゃったの。」

急に呼び出されて、開口一番に祈は言った。

「私、どうしたらいいのかな。初めてだから、よく分からなくて…」

夏休みのことだった。

中学1年生の頃、俺たちはよく2人でつるんでいた。

「何でそういうの俺に聞くの」

俺でもない人間に好意を寄せられて頬を染めている祈に腹が立った。
俺に見せる笑顔はいつも何かを隠しているのに、この時ばかりは心から喜んでいるのだと感じられて、余計に負けた気になった。
だからきっと、俺の顔に表情は無かっただろうと今は思う。

「悠暉はかっこいいから、そういうの沢山されるんだろうなって思って…。だから、こういう時にどうしたらいいのか聞きたくて…」

俺の前で、そういう話すんな…！
段々と理性は失われていくのに、
祈にかっこいいって言われて少しでも嬉しくなってしまった自分に嫌気がさした。
そんな内での葛藤を悟られまいと、余計に不躾な声色で問う。

「祈はさ、そいつのこと…好きなの？」

「えっ」

小さく声をあげた、彼女の心を見てしまったような気がして気分が悪くなった。
きっと祈は、俺のことなんて何も意識してないんだ。
動揺した彼女から言葉を奪って、俺はその場から立ち去った。

「祈も、そいつに想い伝えればいいんじゃないの」

苦し紛れに、精一杯の見栄を張って…。

目の奥が熱くて、鼻がヒリヒリする。
暑さで火照った頬をさらに熱い液体が通り過ぎる。
涙は止まらなくて、終いには鼻水まで垂れてきた。
……男が泣いてるとか、ホント情けねー…。
祈に対しての恋心を、こんな形で自覚することになるとは思わなかった。
……もう、こんなに好きだなんて、分からなかった。

「悠暉」

いきなり。
それしか思い浮かばないほどピッタリの表現だと思う。
そう、彼女はいきなり曲がり角から姿を現し、俺の名前を呼んだのだ。

「いっ、祈！？」

鼻水を啜りながらだったから、少々声がくぐもっていた。
祈は、肩で大きく息をしている。

「何でここにいんの？　さっき、空き地に居たはずじゃ…」

泣いていることも忘れて素っ頓狂な声をあげた俺。
祈は、気にしていないようで、まだ整いきっていない息ながらも、俺に説明してくれた。

「後ろから追いかけたら、悠暉に逃げられると思ったから、悠暉の家までの道を近道して待ってたの…。……ここで」

一頻り説明を終えた祈は、まるで機嫌を伺うかのように俺の顔を覗き込んだ。

「……なんで、追ってきたの」

体はあまり強い方じゃないと語っていた祈が、俺のために息を切らして走ってきた。

……その事実がもし無ければ、俺はここまで期待することは無かっただろうか。

「私は、悠暉が……好きだから」

先ほどまで溢れて尚、止まらなかった涙はいつの間にか止まっていた。

赤く腫れ上がった目が乾燥して少し痛い。

「悠暉が好きだから、桐原くんは好きじゃないの…。私、っ私ね、悠暉が好きなの。他の誰も見えないの…。もう、これ以上無いってくらい好き…っ、好きなのにね、私、悠暉と一緒に居たら、もっともっと好きになっちゃうの…！　これ以上好きになって、はる、き、に…迷惑掛けるんじゃないかなって…怖くなって、でも、桐原くんに告白されても、悠暉しか好きじゃなくて、悠暉しか見えなくて……、わたっ、私…、悠暉が好きです…！　死ぬほど好き……」

俺のものだった涙は、彼女のものへと変わっていた。

感極まって泣き出してしまう彼女を、他の何よりも美しく感じ、そして……愛しいと思った。

体は言うことを聞かずに勝手に動いて、俺は彼女の華奢な体を抱きしめていた。
すぐに折れてしまいそうなほど細かったのに、柔らかくて、温かくて…。
彼女の小さな手が俺の背中に回ったとき、嬉しすぎて、泣きそうになった。

「俺も好き……祈だけが好き……」

手一杯だった俺は、長い時間を掛けても、彼女に言うことが出来たのはその一言だけで。
それでも、彼女は一生懸命に背伸びして何度も何度も頷いてくれた。
祈は、その後も俺の胸に顔を埋めて泣いていた。

中1、夏。
誰も居ない商店街の裏道でのことだった。

「桐原の件は、どうなった？」

パンを小さく一口かじって、祈は俺の隣に腰掛けた。

「ごめんなさいって言ってきた」

「……そっか」

「うん……」

告白から翌日。
俺たちは、校舎の裏庭で昼食をとっていた。
「なぁ祈。お前、俺のこと好きって言ってたのに、どうして桐原のこと、俺に相談したの？」
「そ……れは…、い、言わなきゃダメ？」
顔を赤くして俯いてしまった祈。
余計に好奇心が湧いてきて、俺を燻る。
「ダーメ」
俺を見て何を思ったか分からないが、祈は教えてくれた。
「えっ、えと…、悠暉がどういう反応するか、気になって…。」
今度は俺が赤くなる。
俺…、祈に試されてたってこと？？
「ちゃんと妬いてくれたら、私のこと好きって分かるからその時は、告白しようって思ってて…」
ぐはっ！
俺、祈の思い通りじゃん！！
「で、でもさ！　俺、帰ったじゃん！　何で俺が祈のこと好きって分かったの！？」

ちゃんと考えれば分かるはずだったんだけど…。
墓穴を掘った。

「だって悠暉、追いかけたら泣いてたから…」

あ、あ、あ、あああ穴があったら入りたいいいいぃぃぃ！！！！！
ダメだ！
体中の穴という穴からいろんな液体が止めどなく溢れてくるよ！！？
どーしよ、コレ！
どーしよ、俺！？

「でもね、すっごく嬉しくて、悠暉は泣いてるのに声だして笑っちゃいそうになって…」

「それって、俺の泣き顔がウケたからじゃん！？」

「ちっ！　違うよっ！　ほ、ホントに嬉しかったからだって！」

「ウソだ！　じゃあ何でどもってんだよ！！　今笑ってんのだって隠しきれてねーかんな！！」

「ウソじゃないもん！」

裏庭には、俺と祈。
２人の笑い声がいつまでも木霊していた。

この時を最後に、祈は俺の元に現れなくなった。
学校にも、

俺の家にも、
あの空き地にも、
２人で行った場所のどこを探しても、
彼女を見つけ出すことは、出来なかった。

俺は今、高校２年生。
あれから４年の時が過ぎた。
実は入学式の時、紅科を祈だと勘違いして声を掛けた。
でも違くて、間違った俺に優しく丁寧に説明してくれた彼女は、本当に祈に見えた。

今、俺の隣に居てくれるのは紅科。
だから、祈が今どこでどうしているのかは分からない。
そして、……分かる必要も無い。
もう、俺と祈の関係は既に消えているのだから。
なのにどうして……。

俺は、思いも寄らない形で再び彼女と関わることになる――――……。

第7話　黒い会長と失踪した少女　～過去篇～（後書き）

長くなり、申し訳ありませんでした（＜＿＞）

これから、彼らは交わっていくことになるのですが、シリアスは少し飽きてきたので、いつもの軽いテンポに戻したいと思います！

勝手ですみません（＾＿＾；）

では！

ここで一旦区切りがつきますので。

ここまで読んでくださってありがとうございます（＊＾＿＾＊）

第8話　黒い会長と衝撃の新事実（前書き）

遅くなりました！
ちょっといつもと比べて短いかもですが、ヨロシクお願いします。

第8話　黒い会長と衝撃の新事実

今俺は、2年1組の教室の前に立っている。
同じ学年とはいうものの…、やはり、何というか…、威圧感？があって入りにくいものだ。
それに俺は先日までパシられていた身なのだ。
何かを覚悟するのは自然の摂理ではないのだろうか！？
……というか、なんで俺が1組の前に突っ立っているかというと、紅科との仲直りのくだり（前々前回辺りかなぁ…）に、我妻と交わした約束のせいである。
『俺は紅科チャンの情報教えるから、お前は姫澤チャンの情報持って来い』
…って感じだったかな？　うろ覚えだけど。
で、俺は健気にその約束を守ろうとしている訳ですよ。
何気にあいつのおかげで仲直り出来たし…、さ。
だけど俺はこの後、地獄を見ることになる……。

「あれ…、悠暉くん？　どうしたの？」
煌びやかな笑顔を浮かべた女子3人衆がこちらに向かって歩いてくる。

なんか怖いんだけど……。
俺は鏡を見ずとも顔が引きつっていることを悟った。
何でだろうなぁ…、俺の本能が告げている。……逃げろ、と…。

「なんか顔青いよ？　大丈夫？」

うんうんうん、大丈夫だからそれ以上近寄らないで！！！
俺の願いとは裏腹に彼女たちは腕を組んでくる。
ちょいちょいちょい…、あんまそのミサイル近づけないで！！
俺、その２つの兵器見るとマジで理性が…！

「おう…大丈夫……」

背中には冷や汗がとんでもなく流れてビショビショなんだけど、
顔は真っ赤で……鼻血がでそうだ…、ま、ミサイルを搭載している
彼女が悪いんだけどね！！

「何の用事？」

両手に爆弾だよコレ！
俺、マジ死んじゃう……！

「こんにちわー、柚木（ゆずき）くん居るかなー？」

……ああまた。
ホント、空気壊すの大スキだなお前は。

「あ、神御蔵さん。資料出来ました。すみません、わざわざ来てくださらなくても…」

「ううん、いいよ。これ位やらないとね。」

そして、あたかもそこにいることに今気づいたといったように俺に目を向け…

「悠暉！？　あたしずっと探してたのに！　ゴメンねみんな、お邪魔しました」

俺を引きずってそのままペコリとお辞儀をし、教室から連れて行かれてしまった。

…、まあ、ここまででも十分地獄だけどね。

でも衝撃は大抵ラストだから待っててね★キャハ＾＾

うん、ごめんね。もうやめるから。

「また来てなー、紅科チャンー」

「悠暉くん、またおいで？」

「あたしら待ってるからねぇ！」

「お二人さん、また来てね！」

なんだか、結構な歓声に送られたわ。

って、そこまではイイ気分だったのだが。

扉をガラリと閉めて、紅科が開口一番言ったのは…

「悠暉あんたねぇ、バカじゃないの！？」

ばっ…バカですと！？

言っておくが俺は何気に頭良いぞ！？

「あそこは男も女も肉食系が揃ってんのよ！　そんな中にモヤシのあんたが入っていったらどうなるか分かってんの！？　最後には生まれたての子鹿状態よ！　それに…！　それに…」

一気に捲し立てておいて、急に語尾を小さくする紅科。

え、なになに？？

きになるじゃん。

「言い寄られてへにょへにょになってんじゃないわよ！」

真っ赤な顔で叫ばれた。

「んなっっっ……！」

さすがにコレは黙ってはいられないでしょう。

「しょうがねーだろ！？　俺の周りに女なんていな……ゲフンゲフン！」

遅かった。

鳩尾に鈍い感触が残る。

悲しいかな、俺はすっ飛ばされた。

「貧乳で悪かったわね！　別に悠暉なんかに意識されても困るわよ！」

心なしか紅科の瞳が潤んでいるように見える。

……のは気のせいか？？

「いやでも紅科はまだ背とか伸びるんじゃね？　まだ発育は終わってね……」

「中学生から止まってるわよ！！」

「お、おぉ……」

為す術なし。
八方塞がり。
……きっと今の俺のためにある。

「で、でも！　紅科は可愛いから大丈夫だ！」

もう極論です、ハイ。
でもこんなこと言ったら俺がイタいよね？
…言うつもりじゃなかったんだけど……。

「うるさい！！」

なんでっっっっ！！！？
またすっ飛ばされた。

すると、プイとそっぽを向き、身を翻して帰ってしまった。
彼女の長い髪の毛に隠れて見えなくなった耳が、後方の風に吹かれて見えたとき、思わず口の端が上がってしまった。

ふわふわ漂う柔らかい毛質の彼女の髪の毛は、午後の陽に照らされて琥珀色に輝く。
俺が目を細めたのは、何の眩しさからだったのだろうか。
じぶんでも、よく分からない。

今度は昼休み。
真面目に姫澤についての情報を得ようとまた1組教室に来ていた。

「あっ悠暉ー！　来てくれたんだ！！」

もう呼び捨てかよ。
場末のチーママ並の声だぞ、甘ったるいぞそれ。

「さっきは会長に邪魔されちゃったけど、さぁ……」

グイと近づく顔。
化粧で隠されてはいるものの、肌はデコボコしている。
脳にまで届く、甘い香水のにおいが鼻を突く。

「あたしたちと、楽しいことしない？」

さっきは巨大ミサイルのせいで見失ってたが、あんまり美人ではない。
毛穴から違う。
やはり紅科は美人だ…、差は歴然なんだなと改めて感じた。

「うん、後でな…。それより、姫澤ナントカ、って人このクラスだよな？　紹介してくれない？」

「え……、姫澤？　姫澤に会いに来たの？」

なぜか急激にテンションを落としていく3人。

「姫澤は、あいつだけど……」

その指さされた方向を見たとき、俺は先ほどのテンションの下がりようを理解したのである。

そして、コレが。

冒頭の“地獄”の結末なのですよ。

そこには、筋肉質で、明るい茶金の髪をした男がいた。

ピアスを開けていて、制服はダルそうにユルく着こなしている。

顔はまあまあ端正だけど…、不機嫌な表情しか浮かべていない。

彼の名前は姫澤（ひめざわ）　咲（しょう）というらしい。

笑えねえオチだ…。

彼の家は、3兄弟で、長男が美稀（よしき）、三男が真綾（しんりょう）と言うらしい。

全員、女だと間違える名前だ…。

ややこしいのは、もう懲り懲りだよコノヤロゥ！

第8話　黒い会長と衝撃の新事実（後書き）

コメディー要素復活です。
ちょっとオチが酷かったですかね？

ここまで読んでくださってありがとうございます^^

第9話　黒い会長と全ての引き金（前書き）

遅れてしまってすみませんでしたｏｒｚ

ストーリーの主旨に迷ってしまって…。

以後、気を付けますので。

では、よろしくお願い致しますｍ（　）ｍ

第9話　黒い会長と全ての引き金

「異議のあるヤツ手ぇあげてーハイいませんねではこれにて図書委員会会合をとじさせて頂き――――…」

「頂きません」

放課後、図書室。
俺は何と、図書委員会委員長であった。（委員会サボって寝てたらいつの間にか俺になってた、という笑えない話）
…っていうのは置いといて。
適当に終わらせようと、資料を見ながら棒読みで進めてたら、先公にボコられたところでした。

「ってぇなあ…」

「委員長はこの後中央委員会もあるでしょう？　さっさとパパッと終わらせてそっちに行くって気は無いの？」

この呆れ顔でもの申す男勝りな女教師は、図書委員会顧問、競技かるた部副顧問で国語科の高梨（たかなし）　莉帆（りほ）２４歳、独し…っ……。

「何か聞こえたかしら？」

「空耳ですね、きっと…」

たちまち俺の頭上に出現した雪だるま。
ってか先生、勝手に人の心読まないでもらえます？
生徒といえども法に触れますんで。「親しき仲にも礼儀あり」っつ

ーか、人権侵害ッスから。

「ほら、ちゃっちゃとやる！　ナウ！！　中央委員会が待っている！！」

そうそう、中央委員会というのは、生徒会役員、各委員会委員長、各部活動部長、各学級役員が集まって開く意見交換会のようなものである。

この会で可哀想なのは、先輩という名の鬼ども（2，3年生）の巣窟に生まれたての子鹿（1年生）が無慈悲に放り込まれることである。

でも、そんなの知ったこっちゃない俺は、どうにかしてサボる策を練っていた。

マジだる…。

副委員長に行ってもらおうかな…。

「……なあ、副委員長って誰？」

「あ、はい。あたしです…」

控えめに手をあげたその人は、明日葉祭、彼女だった。

あ、そうだった…。

俺、委員会一緒だったんじゃん。

いやいやいやいや……、

さすがにこの間の今日でこの展開はまずい。

ちゃんと名簿見ろ、俺！

「あぁ～っと…、ヨロシクな！」

「は…ハイ……」

曖昧な呼び掛けと返事を残して、委員たちは気まずそうに黙りこくってしまった。

恐らく

「こいつら絶対そういう関係だわ…」

みたいのを察知したらしい。

いや、みんなが優秀で俺は困らないなぁ…、じゃなくてじゃなくて！違うんだ！　誤解なんだ！！

何とか、何とか！　その事実を伝えたくて半ば強引に持って行った。

「え～～～っと！　じゃあ今日の議題な！　図書室の貸し出し数が減ってるらしい、だからその解決策をみんなに出してもらいたいと～……」

３０分。

それから俺は真面目に委員長になって会議を進めた。

「はいっ、じゃあ終わりー！　お疲れっしたー！　俺はこれから寝て――――…」

ガコッ

「きませんよ勿論ハイ。」

後輩はみたらしい。

高梨に殴られ、瀕死で泣きすがる俺の姿を……。

「あ〜〜、容赦ねぇ〜」

ファイルを持ちながら、中央委員会の行われる会議室へと足を運びながら独言する。

頭はジンジンと熱を持つ。

「普通同じとこやるかよ……」

あー、やべ、涙が出ちゃうわ…。

「あ…あのっ！」

後ろから声が掛かる。

少し高い、渇いた声だった。

振り向けば祭がそこにいた。

もう一度呼びかけようとして口を開き、今一度閉じて、唇をペロと舐める。

ちいさな仕草が可愛らしかった。

「万々原くん…、あたし。この前のこと、まだ言い切れて無かったよね…」

「う、ん」

溢れんばかりの緊張が伝わり、気圧(けお)される。

鼓動が聞こえてしまうのではないか…。

「だから、中央委員会が終わったら、話したいの…！」

真っ直ぐ。

これまでにみたことのない程澄んだ瞳で俺の目を見据える。

「教室で、待ってる、ね…」

返事をする間もなく、彼女はくるりと身を翻して廊下を引き返していった。

うわぁー！　うわぁー！

ついに来たよ、この瞬間が！！

人生初告白ですよぉぉ！

背景にお花を浮かべながら緩みきった顔でスキップしていると、誰かにぶつかった。

不運にも俺はまた同じところを強打してしまったのだ。

「…ってぇ～……」

見るとそこには、俺よりも持ち物を盛大にぶちまけた我妻がいた。

「いやお前かよ！！！」

普通空気読んだらそこでぶつかるの、新キャラの女の子じゃね？

画的にもむさ苦しいし、ここで新たな萌えキャラを…ゲフンゲフン！！

「こっちの台詞だわ！　普通ここでぶつかるのは姫澤チャンじゃね

！？」

途中まで、俺と全く同じことを考えていたらしい。
だが、内容が変化したときに気づいた。
俺、あの重大事実をまだこいつに言ってねえ…！

「なあ我妻。お前にはオアシスだったんだろうな…。悪い、姫澤は男だ」

……。
まあ、こうなるよね☆
彼の喉から必死に絞り出された声は、信じがたいほどか細かった。

「……ウソ」

「いや、マジで。パツキンのヤンキー？　っつかチャラ男だった。がたいも良くてさ、筋肉質で格好良かったー。」

「……。じゃあさ、名前は何て言うのさ？　あれは“サキ”でしょ？」

「それが…“ショウ”と読むらしい」

カハッ！
掠れた音と共に、吐血しながら廊下に倒れた我妻。
すると、最期に俺の耳元に彼の思いを呟いた…。

「……イケ…メ、ン…、爆は、つ…しろ……」

目が本気（マジ）でした。

ということで俺は、
放送委員長の我妻が姫澤に木っ端微塵にされて戦線離脱です、
と中央委員会の責任者、田渕（たぶち）に報告して、自分の席に着いた。

案の定、田渕が理解出来なかったのは言うまでもない。

「静かにしてください！　今回の資料を配付します、意見も述べてもらうのでよく書き込んでおくように！」

声が掛かった当初、微睡み始めていた俺は、ハッと目を醒ます。
そうじゃん、中央委員会ってどんな組織だっけ…？

？各学級役員
？各部活動部長
？各委員会委員長

そして……

？生徒会役員

ここまで気づかなかった自分の鈍さに腹が立つ。
声の主は、恐るべき仮面令嬢、神御蔵紅科。

「会議中に眠り込んだりしないこと！　いいですね、……万々原くん…？」

ドッと笑い声が上がる。
そんなのはどうでもいい。

俺には祭が待っているんだ。
ここを、命を賭してでも抜け出す……
あ、いや、命賭したらダメじゃん。
とにかく！
何が何でも生き延びなければならない…！

視界に佇み、俺が決して目線を外さなかったその先には。
凍てついた瞳で口の端に弧を描く可憐な生徒会長が映し出されていた。
※）別名、ドＳモード

第9話　黒い会長と全ての引き金（後書き）

戦慄……！

ここまで読んでくださってありがとうございます。
これからもよろしくお願いします（・ω・人）

第１０話　黒い会長と俺たちの純情（前書き）

大変お待たせ致しました。。。

申し訳ありません！
スランプで……；；
あ、いえ。言い訳はいたしません！！
すみませんでしたm（＿＿）m

第１０話　黒い会長と俺たちの純情

何かある……
何かある……！
……なにかないとおかしいんだ…！！

中央委員会中、紅科の視線に戦慄してからというもの、頭の中にはそれしかなく、焦れていた。
……会議の内容は毛の先ほども脳内には滑り込んではいないのだが。

「みなさん、起立してください。これで中央委員会の会合を閉じさせていただきます。今日話し合ったことを委員会の皆さんにしっかり伝えておいてください。では解散です！　お疲れ様でしたー」

紅科の澄んだ声が会議室に響き渡る。
つづいて、各長たちの声も…。
みんなが席をたつ音が、何とも虚しく木霊する。

何も、無かった…。

俺は、今まで自分で勝手に思いを巡らせていたことに、羞恥心を抱いた。
自意識過剰、傲慢…。
そんなことばが脳裏に浮かぶ。

行き場のない羞恥と、意識していたのに何もなかったという疎外感だけが俺のなかで渦巻いていた。

少し火照った顔を隠すように手で口元を押さえ、もはや俺しか居な

いと思っていた会議室後方のドアに手を掛けた時だった。

「万々原くん！　話があるんだけど！！」

あぁ、ダメだ。
すぐ反応してしまう。
これは、呼ばれたときの反動だろうか。
それとも……、呼んだのが彼女だから……？

「もうっ！　悠暉っ！　あたしが呼んでるのに聞こえないの！？」

室内にぐるりと並べられた机の、一番前（通称お偉いさんの席）。
痺れを切らし、小さい体を目一杯振り回して叫んでいる紅科がいた。

「…おまえさぁ、ホントそんなんでこれから猫かぶっていけんの？」

呆れてしょうがなく漏れたようにしたかった。
でもやっぱり、どうしようもない嬉しさが勝ってしまう。
口元に生まれた僅かな笑みを隠し通せたかは分からない。

「あたしが誰だか分かってんの？　神御蔵紅科よ？　もし、あんたがあたしのこと言いふらしたりしても信じるヤツなんて居ると思う？　否！　居るわけ無いのよ！！」

俺を見下した目で見つめせせら笑うように言った。
ホントに女王みたいな風格を纏っていた紅科だったが、それは急に消え失せた。
眉をハの字にして小さくなる紅科は、先ほどの威風堂々とした姿から思い浮かべれば本当にちっぽけで、情けなく見える。

「…って、……そんなこと…、どうでもいいのよ……」
俯きながら、俺を恨めしそうに見遣る。
あれ？　俺なんかしたっけ??
「な…なんだよ」
すると今度は黙りこくった紅科。
「どうした？　具合でも悪いのかよ…？」
本当に心配になって、俺は俯いている紅科を覗き込んだ。
やりすぎた……！
そう思っても、後の祭りだ。
俺と紅科は鼻がぶつかってしまうほど近くにいて、彼女が顔を上げた瞬間バッチリ目が合ってしまう。
表現のしようがないほど、お互いに顔は真っ赤だったわけで。
無意識の内に体はサッと離れた。
「べっ…別にどこも悪くないわよ！」
……。
どうやら、何事も無かったようにやり過ごすらしい。
ほほぉ、それは良い案だ。
乗らせて頂こう。
「ふーーーん…、なら良いんだけど、さ…。」
でも、俺ちょっとキツいと思うんだけど…。

紅科さん、これで乗り切れますかね？？？

「「……」」

ほらね！！

やっぱりダメじゃん！　案の定会話無くなったじゃん！！

すっげ～～～～気まずいんだけど！

「ね、悠暉……」

「ぅん！！？」

勢い余って振り返ると、そこにはもう先ほどの出来事は鎮火して落ち着き払い、淡々と言葉を紡ぐ紅科が居た。

あれ？　もしかして意識してテンパってたの俺だけ？？

超ハズいんだけどっっっ！

「さっき、祭ちゃんと何話してたの……？」

あまりにも予想外な質問に拍子抜けしてしまった。

「ふぇっ！？」

「だからっ！　会議始まる前に2人で話してたじゃない！　何、話してた、のよ」

態度とは裏腹に、語尾も体も小さくなる紅科。

性格上、気丈に振る舞うしか出来ないのだろう。

そんな姿に狼狽えて、なんだかドキドキしてしまうのっておかしいんじゃないかっ！？

「あー……、多分あれだよ。この間の話の続き、だと思うけど。…そんで、中央委員終わったら教室に来てって言われたし」

「ふーーーーーん…」

あれ、紅科さん。
反応が芳しくないですね。

「……行くの？」

蚊の鳴くような声で、俺に問いかける。

「え！？　そりゃあ、まあ……。この間、どっかの誰かさんに邪魔されたしね～～」

何だか意味深な雰囲気に飲み込まれたくなくて、掠れ気味だったが笑いを交えた。
……。
まっっっったく怒る気配がないですね。
あれ、俺コレ地雷踏んじゃった系？？

ガタッ

情けないことに、一瞬からだがビクッってなる。
紅科が席を立った。
俺の方に歩いてくる……。

そんでそのまま隣に来ればいいものを、１つ席をあけて座った。
顔を上げない、ずっと俯いている。

「……あたしといるのに、祭ちゃんのとこ行くの……？」

下を向いているから顔が見えない。
そんな可愛いこと言うなや！　惚れてまうやろおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！
……やばい、超反応見てえ！
自分の顔も、人に見せられないくらい赤いのに、こんな弱い紅科、初めて見たし。
いつもの仕返しだ！

「……行って欲しくない？　……どうして欲しいの？」

「…それ、あたしに聞くの…？」

色素の薄い髪の毛を、ふわりとかきあげる。
その隙間から、真っ赤に染まった彼女の頬が覗けた。

そして、やっと顔を上げ盗み見をしているかのように、チラリとこちらを一瞥した。
するといきなり、紅科の手が俺の頬に伸びてきて……

ハッとしたように手を止めた。

「紅科？」

「……何」

「具合とか、本当に大丈夫か？」

そう言った途端、驚いたようにこちらを見て。
それから、どこか寂しげに微笑んだ。
「うん、平気。だから、行ってきなよ」
「本当に？　細いんだから、あんまムリとかするとすぐ体調壊すぞ？」
「ハッ！　人の心配ばっかしてるからパシリになんのよ。早くしないと、また邪魔しにいくけど？」
紅科は腕を組み、足を組み、俺を見下したように笑った。
あれ、戻った。
「あ、あたしも用があったんだったー！　じゃあね、また明日ー」
そう言うと、柔らかそうな髪の毛をなびかせて颯爽と会議室から出て行った。
勝手に足止めして、勝手に帰っていきやがった。
つか、何も話なんてなかったんじゃん。
ふと窓を見れば、夕日がこれまでに見たことないほど綺麗で。
すこし見入ってしまった。
俺も会議室をでて廊下を走り、教室に向かった。
会議室の隣の教室に、暇を持て余しながらも帰れずにいる紅科がい

ることを知らずに。

第１０話　黒い会長と俺たちの純情（後書き）

今年一番最後の大仕事でした。

来年もヨロシクお願い致します。

第１１話　黒い会長と絡まる糸？（前書き）

長らくお待たせ致しました～（＊^＿^＊）
晴れて宿題から解放されまして、疎開（福島県民なもので放射線から逃げようとｗ）からも帰ってきたことですので、予告とは違うんですが、早めに投稿させて頂きました！

今回は張り切りすぎて長くなってしまいました。

読みづらいのは承知ですが、どうぞよろしくお願いしますｍ（＿）ｍ

第１１話　黒い会長と絡まる糸？

さっすが私立高校！
何でこんなに校内がだだっ広いんだよ！！
心の中で悪態をつきながら、廊下を突っ走る。
結構本気で走ったのに、教室に着くまでは3分くらい掛かった。
本気出せば、普通に1？走れちゃうよオイ。

「祭！！」

年のせいなのだろうか…。
もう疲労感でいっぱいになっていた俺は、半ばヤケクソで勢いよくドアを開ける。

「キャー！！」

大きな“ガラガラ”という音は案外堪えるのかもしれない。
祭は頭を守るようにして抱え、金切り声を上げた。
怯えさせたのは俺が悪いけど、でもやっぱおとなしめ女子は違うな。
これが紅科だったら絶対女らしさの欠片もねぇのが吹っ飛んでくるわ。

「悪い悪い、俺！　俺デース！！」

今は流行を過ぎ去ったどこかの詐欺のような台詞を口にして、祭を落ち着かせる。
ビビらせて悪かった、と最後に蛇足する。
でも後々考えれば『待たせて悪かった』だろ！！　……と反省。

「な…なんだ…万々原くんか…。ビックリしたぁ…」
本気で悪いことしちゃったなぁ……と反省。
いやふざけてないよ！？　たまたまなんだからねっ！！
と、よく見れば本当に怖かったのだろう、肩が震えている。
「委員会、お疲れ様でした。呼び出しちゃってごめんね」
自分のことは置いておき、他人の心配をする。
大和撫子の鑑っていうもんだ。
そんな可愛らしさに、俺は男の本能で動いた。
何故か、知らず知らずのうちに祭の方に手を置いていた。
祭は驚いて顔を赤くするが、俺は不思議なことに恥じらいを感じなかった。
「いやホント、遅れてゴメン。……それと……」
そして俺は、先ほどから気になっていたことを続けた。
「あの…、俺ばっかり『祭』って呼ぶのイタいからさ、『万々原くん』じゃなくて、下の名前で呼んで」
「え……、あ…、えと、あの…じゃぁ……はる、き…」
と、ここまでは良かったが、やはり祭。
間髪を入れずに、

「……くん…」

と、恥ずかしがって俯いてしまった。
黒くて長い髪の毛を耳に掛ける。
覗けた頬は、真っ赤だった。

「ハハッ！」

そんな姿に堪えきれなくなって、笑みがこぼれた。
……って何か最近俺、Sに目覚めてる気がする。大丈夫かな？
大丈夫だよねっ！（汗

「なっ…！　なんで笑うの！？」

「や……、なんとなく。まぁ、それはいいじゃん」

「え……何、気になるよ……」

「いーから！　気にしなーい！　ほら、それより用事って何？」

悟られないように…。
そんな下心も無かったと言えばウソになる。
だけど、本当に楽しみにしていた本題にはやく移りたかった。
俺はもう、ちょっとした変態並に興奮していた。いや気持ち悪いけども！！

「あ……、そうだよね。私、言いたいことがあったの。え、と……
…」

どこまで純情なのだろうか。

緊張しているのだろう、祭の視線は彷徨っていた。

「あの……、はる、き、くんのこと…、私、気になって……」

祭！！　もうちょい！　もうちょいストレートにお願いしゃす！！

……って、予想はしてたものの……。

本人に言われると、とてつもない破壊力が伴いますな。

「あの……、間違ってたらゴメンなんだけど」

……？？？

間違ってたらゴメン？？？

「私、お姉ちゃんがいたんだ。……ままは……悠暉くんと中学一緒だったって言ってたから、確認したくて…」

祭は尚もモジモジしている。

「「……」」

沈・黙。

ってか、俺の場合は唖然としてるんだけどね？

「え、あの……それで呼び出されたの俺！！？」

思わず……いや、妥当というべきだろう。

素っ頓狂な声が出てしまう。

「うん、それでね……」

あれ？
思いやりのある祭ちゃん。
そこスルーするんだ？
何だよ！　こっちはずっと楽しみにしてたんだよ！！
ショックで肩の力が抜ける。
そこで俺は精一杯の落胆のポーズをとった。（頬に手を当て、ムンクみたいにして、イナバウアーよりも思いっきり仰け反ること）
……ってあれ？？
何か、会議室の方明かりついてる……。
まだ紅科いんのか？
でも帰ったはずじゃ……？？
そんなことを思っていると、

「この人。分かると思うんだけど…仲良かったって言ってたし……」

祭はケータイを取り出して操作をする。
ボタンを押す指は、白く長い。
いちいち感情のこもらない無機質な音を聞いていると、何故か無常観を煽られる。

「分かる？　…って今判明しても遅いか」

そう言って、祭は自嘲気味に微笑んだ。
いつも憂いを帯びているその瞳に、少しだけ、寂しげな色が見えた気がした。

「遅い？　遅いってどういうこ……」

そして、俺の目の前にその写真が突き出された。

「お姉ちゃん。私の、お姉ちゃんだよ」

本当、人生って何なんだろう。
今まで生きてきて、そんなこと初めて思ったよ。
別に悲劇だ何だ言いたい訳じゃない。
でも、余りにも不公平だ。

「い、のり…？」

放心している。
口だって、開いたまま閉じることが出来ない。
やっと絞り出すことが出来た言葉は、あまりにも呆けたものだった。

「き…姉妹……？　い…祈は！？　今、どこに居るんだよ！！？」

何もかも、忘れて、祭の肩を掴み、揺さぶった。
揺れる髪の毛から、淡いシャンプーの薫りがする。

「ずっと…、どこに行ってたんだよあいつ…。何してるの？　ここから近い？　遠い？　祭、早く言ってくれ！！」

今まで音信不通だったことに対しての憤り。
やっと見つけることが出来たという喜び。
そして、心の底から湧き上がってくる愛おしさ。
その全てが俺の中で混ざり合い、混乱していたけど、でもやっぱり最後には嬉しさが勝った。
自分でも単純で安い男だとは思う。
でも…、それでも……

「死んじゃったの」

……は……？

死んだって……ダレが…？

「私の両親が離婚してて、だからあんまり会えなかったんだけど……。私も知らされたのついこの前で…。もう、３年前に亡くなってたの」

……質の悪いウソつくんじゃねぇ…！

そりゃあ、もともと体が悪いんだってのは知ってたけど……。

「お葬式も行けなかった。……お姉ちゃんね、病気だったの。それは知ってたんだけど。でも、病気に負けないで学校は毎日通って

たって……。この間、久しぶりにお姉ちゃんの部屋に行ってみたら、よれた字で『はるきすき』って書いてある手紙を見つけて。きっと、一生懸命辛抱強く書いたんだと思う。それで……私、思ったの。お姉ちゃんが頑張れたのは、会いたい人が居たからだったたんだ、…って」

祈……！

もう、分かる。
ウソじゃない。
祈は。
もう、いない。

「お姉ちゃんは、“はるきくん”の為に、耐えて耐えて…生きてたの……！！」

いつの間にか俺も、祭も、涙で顔が濡れていた。
二人して嗚咽を漏らしながら、ずっと泣く。

ああ、また……。
きみはまた俺をこんなに泣かすんだ。

男を泣かせるなんて辱めを、こうも容易くやってのける。

…俺は祭を抱きしめた。
どうしてそうしたかは分からない。

ただ単に、彼女が好きになったのだろうか。
何かに縋りたかったのだろうか。
いや、きっと…。
彼女の残り香に、頼りたかった。埋まりたかった。

もう、忘れたって自分では思ってた。
どうしてきみはいつも、気づかせるのが遅いの…。

急に居なくなって、責め立てた。

ずっと、憎かった。

俺、あの時随分荒れてたんだよ、祈。
でも、消せなかった。この気持ちだけは…。

好きだ。
すきだ…。
死ぬほどすきなんだ…！

会いたい…！

きっといつか、また会えるんじゃないかって、その時何を言おうかって…ずっと考えてた。
きみとの未来を…、ずっと考えてたんだ。

ずっと探してたひと。
ずっと傍に居てくれたひと。

ずっと、恋い焦がれていたひと。

ねぇ、あなたは今、どこにいるんですか？

第１１話　黒い会長と絡まる糸？（後書き）

シリアスですね～……。

もう「微」を通り越してますね…。

次回は、このお話の同時刻、紅科のところでは…？　という話です。

そうですね、今度は１０日にＵＰします。

では、ここまで読んでくださってありがとうございますｏｒｚ

第１２話　黒い会長と絡まる糸？～紅科ｓｉｄｅ～（前書き）

滑り込みセーフ！

今回も長いです。

第１２話　黒い会長と絡まる糸？～紅科ｓｉｄｅ～

あーいけないいけない。
危うくタガが外れるところだった…。
…でも、それも良かったのかも……。

生徒会室。
会議室の隣にあるこの狭い部屋に、あたしは逃げた。
夕焼けが、目に沁みるくらい綺麗だった。
もう、殆どの生徒は校内に居ないでしょうね…。
そんなことを考えたときだった。

ガラッ

生徒会室の扉が開けられた。

「！？　神御蔵…？　あーっと……週番で確認に来たんだけど…」

そこには、明るい茶金の髪の毛に緩くウェーブをかけて、ピアスをしている不良男子生徒がいた。
……。
なんで不良のくせに週番なんて真面目にやってるのよ。
そしてあたしの名前を勝手に呼び捨てすんじゃないわよ。
まったく…、邪魔しやがって…。
あたし今、１人になりたい気分なのに。

「ねぇ、どーでもいいんだけど生徒会長さん、勉強もしないで遊び

回ってるから俺なんかにテスト抜かされるんじゃないの？」

……は？

「あ、の……、すみませんがどちらさ「姫澤咲。知らない？　この間の定期テストでトップ獲った男だよ」」

食い気味に答えたところをみると、どうやら予想していたらしい。
でも、あたしは気づいた。
どこかで聞いたことがある名前だということに。
悩んで悩んで、必死で頭を捻っていると、

「まだ気づかない？　俺だよ、紅科ちゃん」

そう言うと、前髪をバサリと掻き上げた。

「ここの傷、紅科ちゃんがつけたのに覚えてないの？　無責任なところは相変わらずなんじゃん？」

上の方、キメの細かいその男のおでこには、切ったような傷が出来ていた。
結構な古傷だと思われる。
そんなの見せるなと心の中ではそれ以上の…、まぁ罵詈雑言を浴びせかけていた。
だが、それを見たことであたしの中での人物が一致したのもまた事実である。

「あ……、ショウちゃん……？　ヒメザワショウって…今回の定期テスト1位だった……、ヒメザワサキちゃんって読むんだとばっかり……」

「ショウちゃんやめれっつの。いつになっても変わんねーのな、それ」

そして、優しく微笑んだ。

「俺、先月転校してきたの。何回もすれ違ってるのに全然気付かないんだもんなー、なんかやる気萎えたし」

そしてまた、朗らかに笑った。
彼は、幼稚園、小学校中学年まで一緒だった。
けれど、親の都合で転校していった…、ハズなのだけれど…。

「あたし、高校に来るまで色々頑張ったのよ。しょうがないじゃない、咲ちゃんのこと忘れるのも…」

それを言って、彼の顔を見たら、何を思ったのかぐいと顔を寄せてきた。
真剣な顔に素早く切り替えた彼に、不覚にもときめいてしまった。

「……ウソつけ。俺には感謝してるくせに。……ってか、紅科ちゃん今も猫かぶってんの？」

大きい。
幼稚園の時から、ずっとあたしの方が勝ってたのに…。
それに、甘い香りがする。目眩しそうな程甘いにおいが…。

鼻が触れあいそうなほど近かった距離は、彼の一方的な仕草によって離れた。
心拍数があがってる。なんか、熱い…。
「しょうがないじゃない…。ずっと、こうしてないと…、怖いのよ」
あまり触れて欲しくない部分に触れられて目を逸らす。
「臆病なところも、変わんねんだ」
今度は悪戯っぽく片口の端を上げる。
昔は、すっごくオドオドしてたのに……。
何か挑発的な瞳に、吸い込まれそうになってしまう。
でもやっぱり、トントン拍子で広がった会話に頭がついていかない。
「臆病じゃないわよ。ただ……こうするしか道がないんだもの」
「……前から思ってたんだけどそれってさぁ、お前が道を探してないだけだろ。自分の意志で、自分の未来くらい変えてみろよ」
「ぅ…うるさい……！　あたしのことはあたしが決める！　あなたの見解とは違うのよ！！　余計な…余計な口出ししないで！！」
早口で捲し立てたため、息が上がった。
情けなく肩を上下させるあたしに対し、咲ちゃんは冷静で静かな目をしてあたしを見据える。
先ほどの意地悪な表情は、彼の顔には微塵も残っていなかった。
怜悧とさえ感じるその瞳と、重い空気に息が詰まる。
数年前のことなのに、全くといっていい程面影を残していない彼が、怖くなった。

……いや。ただ、何もかも見透かされているような気がして、怖じ気づいただけだ。

「……とにかく、もう帰るから。じゃあね」

そう言い放ち、席を立ったあたしを彼は、尚も見つめ、そして徐に口を開いた。

「……帰れんの？」

彼の言葉に驚き、思わず振り向く。

言葉も忘れ、呆然と立ち尽くすしかないあたしに彼はもう一度、声を掛けた。

「帰れないからこんなとこ居たんじゃないの？」

熱い。

気付けば涙が頬を伝っていた。

「…なめんな。ずっと一緒にいたろ。それ位分かるっつの」

涙は零れるものの、頭は追いつかない。

ただ、目を見開き、突っ立て居ることしかできなかった。

「……咲ちゃん、あたしたぶん、プライド高いんだと思う」

怖くたって、分からなくたって、見栄を張るしかなかった。

いつでも、邪魔をするものがあったから。

でもだからといって、隙なく隠しきれる器用さは持ち合わせていない。

「……それも知ってる」

そして彼はようやく、力なく微笑んだ。
その彼の微笑によって緊張の紐が解かれたあたしは、喉の奥からこみ上げる声を抑えきれなかったのだ。

「咲ちゃん、あたし、ホントはずっと感謝してた。ずっと、“ありがとう”って言いたかった…！」

「おー、やっぱりね。……今日くらいは泣け！　1日くらい羽目外さないとこれからしんどいだろ」

そうして咲ちゃんは頭を撫でてくれた。

「…あ、咲ちゃんあたし、言い忘れてた。今はね、毎日羽目外してるの」

鼻を啜りながら言葉を発したからうまく聞こえなかったかも知れない。
でも、ちゃんと反応してくれたところをみると聞こえたらしい。

「……は…？　え、何、さっきまだ猫被ってるって言ったじゃん？」

「あーなんかバレちゃって……。その人、ちゃんと隠してくれてるから大丈夫だよ」

「いや大丈夫じゃなくね？」

「ううん、絶対大丈夫。口止めしといたし！」

「そこでえばんなよ。マジで？　マジで信用できるのか、そいつ？」

「ん！　完璧！」

「……紅科ちゃんがそこまでいうならそうか……？　……でもま、俺もいるから。頼ってなー」

そう言って咲ちゃんは、手をヒラヒラとふって、生徒会室を出て行った。

動作が滑らかで思わず見入ってしまったのは、たぶん気付かれてないだろう。

…いやぁ、しかしまさかあの咲ちゃんが…。

「おっきくなって……」

年増のおばさんみたいなことを言って、帰ろうかと思ったとき、ひょこっとドアから咲ちゃんが顔を出した。

「わぁ！　どしたの！！」

「いや、そいつの名前聞いとこうと思って。何てーの？」

あぁ…。なるほど。

あいつ何て名字だっけ…。

「あ、そう！　万々原悠暉っていうの。まぁまぁアホなやつだから丸め込むの簡単だった」

「あっそー。……あんま聞かない名字だな。じゃあまた」

「うん、ばいばーい」

ってあれ？

あたし、悠暉と祭ちゃんののぞきにいこうと思ってたのに……。

まだ間に合うかな……。

第１２話　黒い会長と絡まる糸？～紅科ｓｉｄｅ～（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

第１３話　黒い会長と絶望の中の光（前書き）

こんばんわ＾＾

最近は調子が良くてぅわーい！

って、今回の話の最初はこんなテンションではナイですね…。

よろしくお願いします。

第１３話　黒い会長と絶望の中の光

拭い去れない孤独を噛み締め、それでも振り返ってしまう。
朗らかな笑い声が今にも聞こえてきそうで…。
俺の腕は、無情にも虚空をかいただけに過ぎなかった。
人一人…、惹かれたひと一人……、呼び止めることも出来ずに……。

時間はどれ程経った？
感覚は失われ、現実と幻想の区別もつかず。
それでも、俺の中で消えることのない執念は無様にのたうち回って、
あらゆるものに手を掛け、そしてまさぐる。
もう、形振りなど構っていられなかった。

『心にポッカリと穴が開いてしまったようだ』

人は簡単にそんなことを言うけれど、そんな言葉では表しきれない。
彼女は自分の全てだった、などと胡散臭いことを言うつもりもない。
…言えない。
……こんなことなら、中学を共に過ごしたあの頃、何回も何回も惜しまずに、恥ずかしがらずに…伝えておけば良かったんだ。
想いが通じたあの日から、どことなくこそばゆく感じてしまう自分が居て、心は同じところにあると。
そう安堵し、そして自分が恥をかかないことに一生懸命になった。
繋ぎ止めようとしなかった。

……離すまいと、しなかった。

俺に隠してなければ、きっと、ずっと、いくらでも…！

俺は彼女に呼びかけることが出来た…！

好きだ、と…、何回でも何回でも…。ほんの小さなあいさつだって何だっていい！　ひとつでも多く、話しかけることが出来たんだ……！

『……私のせいなの？』

ふと、耳元でそう囁かれた気がして振り返る。

しかし、教室には俺と祭しかいない。

不可思議に思いながらも、祈の声で囁かれた言葉を反芻（はんすう）する。

祈のせいじゃない。

彼女の一番傍にいながら、彼女の異変に気付かなかった俺が…、一番悪い。

いつだって、彼女に頼ってたんだ。

それくらい、祈が好きだった。彼女に、依存していたんだ、俺は。

「祭…、ごめん…。本当に……ごめん……」

俺は、ずっと祭の細くしなやかな身体に回していた腕に更に力を込めた。

それに少し驚きながらも、彼女はゆっくりとかぶりをふった。

彼女の首筋に顔を埋（うず）めれば、何となく、懐かしい薫りが鼻腔をつく。

触れた髪の毛は、思ったよりもずっと柔らかくて、くすぐったい感じがした。

祭はそっと優しく、俺の背中に手を回してくれた。
祈を失くした孤独。
自らの弱い心に対する自責の念……呵責。
それらを、真っ新な状態に返してくれるような、優しい抱擁だった。
祭の温もりに身を委ね、感涙にむせびそうになった時、事は起こった。

大きな扉を開く音が聞こえたのだ。

その先に立っていたのは――――――……。
紛れもなく、神御蔵紅科、その人であった。

そして怒濤の如くこちらへ向かって進撃してきた彼女は、俺の骨張った手首をむんずと掴み、鬼の形相で教室を出た。
何が何だか分からない俺は、物凄いオーラを出してどこかへ向かう紅科に引っ張られてついて行くことしか選択肢は無かったのである。

「っぅ…、く…っしな…！　おいっ…お前ど、こ行くんだよ……！」

先ほどまで泣いていたことによる嗚咽によるものか、ただ引っ張られての息切れによるものか。
俺がようやく発した声は、嘆かわしくも小さなものだった。

「うるさい！　黙ってついてこい！」

……。

言った途端に頭ごなしで怒鳴られれば言葉を続ける勇気も出るまい。
ってか、ホントどんなタイミングで出てくるんだよこいつ。
どんな状況だったか分かってんのか？　いや分かってても入って来ねぇよな普通。察しるよな雰囲気を。
どんだけ鋼のハートしてんだよオイ。

心の中で文句を垂れ流していても、抵抗をせずに彼女について行く俺は、何だかんだ従順なのかも知れない。

そうしながらも、どうやら目的の場所に着いたらしい。
何とかそこを見ようと振り向けば、生徒会室だった。

「おいっ紅科？　何する気だよ？」

そう問いかけたら、紅科は生徒会室の引き戸を、またも荒々しく開け放ち何やら毒を吐いている。
そして俺をキッと睨みつけ、その細い身体からは到底想像できないような怪力で俺を壁に押し付けた。いや、押し付けたと言うよりはぶん投げたという方が正しいだろう。
俺の口からは、カハッと渇いたものがはき出され、同時に咳き込んだ。

「黙って」

「黙ってられっかよ！　何がしてえんだてめぇ！」

すると、予想外の俺の反撃に驚いたのか、一瞬戸惑いの色を見せた。
でも本当にそれは一瞬。

「お前、俺の気持ちとか分かる？　ずっと好きだったひとが――――――…」

パァンッ

なにか鋭い音が俺の言葉を遮り、それからゆっくりと鈍い痛みが頬に広がった。

「ってぇ……、何するん――――――…」

パァンッ

「ふざけんな！　やめ――――――…」

パァンッ

さすがにこう何度も平手打ちを食らえば言葉を失う。
ただただ呆然とする俺の頬はもう既に、真っ赤に腫れ上がっていた。
ハッとし、もう一度紅科に文句を言おうと彼女に焦点を合わせた。
の、だが……。

「……泣いてんの？」

吃驚した。
彼女の、大きくてクリクリとした瞳には涙が溜まっていた。
長くて上を向いた綺麗な睫毛は、しっとりと濡れている。

「っ……、泣いてない…！」

強情な女だ。
おまけに目まで擦って、証拠すら残しているというのに。

……っていうより何で泣いてんだよ…。
本当、訳の分からねー女。
泣きたいのはこっちだってーのに。

「ふーん……そ…」

うっかり変な空気への入り口作っちまったじゃねえか。
俺と紅科を、重い沈黙が襲う。

だが俺は、ここへ連れてこられた意味を知らなければならない。っていうか知りたい。
勇気を出して尋ねる。

「……なぁ、俺何したわけ？」

すると、この一言で充分だったらしい、彼女の瞳からは一粒の涙が零れ落ちた。
訳が分からなくなって、挙動不審になる俺。
だがやっぱり沈黙は免れたいので、
あ、やっぱ泣いてんじゃん

と…。そう発する前に、俺は彼女の怒りの鉄拳に裁かれた。

「何で祭ちゃんの事抱きしめてたの……！！」

そうして彼女は力なく俺の胸を叩いた。

これは……。

……勘違いしてもいいのだろうか…？

彼女の流した一粒の雫が、今まで見たことも無いほど、清らかで美しく見えた。

第１３話　黒い会長と絶望の中の光（後書き）

頑張りました。

ここまで読んでくださってありがとうございます。
おかげさまでユニークが１０００突破致しました。

これからもこの作品をよろしくお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0541y/

黒い会長とモヤシな俺の４９８日

2012年1月14日21時47分発行